

谷村文庫蔵『萱草』『賦何船連歌』管見 — 連歌師宗祇 文明のころ —

日本学術振興会特別研究員 長谷川 千尋

はじめに

宗祇は、日本の中世後期における古典文学の権威であり、連歌史上の最高峰と称される人物でありながら、その前半生はよくわかっていない。生まれは応永二十八年（1422）。後年、『浅茅』の中でみづから回想しているところによれば、三十余歳で連歌の道に志したらしい。当時としてはかなり遅い出発である。現存作品を見ると、三十七歳の康正三年（1457）『賦何路連歌』に、ようやく宗祇の名が現れる。以後、師の専順や心敬らの連歌の座に連なっている。文正元年（1466）には都から関東方面に下り、各地で七年の歳月を送る。この間に上京することもあったが、再び都での生活を始めたのは文明五年（1473）、五十三歳の秋の頃であった。そして驚くべきことに、一、二年のうちに都の貴族達にその実力を認められ、後土御門天皇の目にとまる程の存在になってゆく。この時期、宗祇の置かれていた文壇上の立場はどのようなものであったのだろうか。ここでは、附属図書館谷村文庫に蔵される『萱草』、『賦何船連歌』の二点——いずれも古写本であるとともに伝記資料としても貴重なものである——を紹介しながら、文明六～九年頃の宗祇を追ってみたい。

1 『萱草（わすれぐさ）』

文明五年（1473）に東国から帰洛した宗祇が第一に成したのは、自選句集『萱草』六巻であった。この『萱草』には、文明六年二月下旬の、以下のような奥書が備わる。

〈奥書A〉此一帖者、連歌好士宗祇以自句編集之、誂青蓮院准后加清書、於外題宗祇依所望染禿筆者也

于時文明六年夾鐘下澣、書之

ここから、『萱草』本文の清書は、青蓮院准后尊応に依頼されたことがわかる。『萱草』所収句の詞書によれば、宗祇は青蓮院主催の月次連歌会に参加して発句を詠んでいるから、尊応とは交渉を持っていたのである。一方、『萱草』の外題を染筆し、奥書Aを記した人物の名前は記されていない。奥書Aの執筆者については、足利義政、一条兼良、二条持通に比定する説がある。

ところが、谷村文庫本『萱草』（4-24／ワ1 貴）には、上記の奥書に続けてさらに次のようにある。



『萱草』奥書

〈奥書B〉此一冊、彼好士依懇望難黙止、
加愚筆之处、式部卿宮被覧之次、
令録右奥書給而已

于時文明第六閏逢敦艸歲沽洗下
一候、記之 北麓野叟

この奥書Bの文面は、「この一冊（萱草）は、彼好士（宗祇）の懇望を黙止しがたく、私の拙い筆を加えましたところ、式部卿宮が御覧になるときに、そのいきさつを記すよう命ぜられて、私は右の奥書（A）を書いたのです」という意味に理解できる。すなわち、奥書Aは、式部卿宮貞常親王のために「北麓野叟」が記したものであることがわかる。この「北麓野叟」と名乗る人物は、貞常親王の命を受けて奥書を記し、親王に敬語を用いていることから、將軍足利義政であるとは考えにくい。何より「北麓」の語に注目する必要がある。当時、比叡山の麓、岩倉長谷の地には聖護院の山荘があった。門主の道興准后と宗祇は、すでに文明四年に美濃で連歌の座を共にしており、「北麓野叟」とは道興である可能性が高いと思われる。

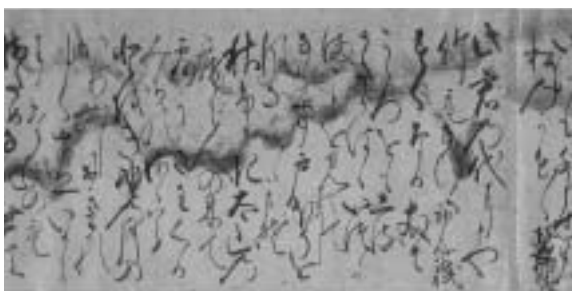
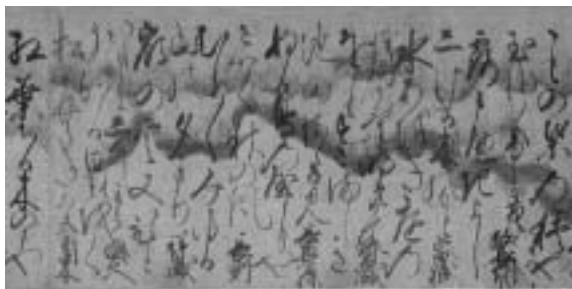
『萱草』は、このようにして、宗祇の帰洛後間もない文明六年二月に、貴顕によって清書され、貞常親王の閲覧に供せられた。そして、この年の八月には、後土御門天皇に進上するための「宗祇三十句連歌」を、三条公敦が山科言国に書写させている（『言国卿記』）。言国は、翌文明七年四月にも「宗祇沙汰ノ連歌」を書写している。この度は書写に三日をかけ、三条公敦と二人で校合した上で天皇に進上している。天皇はお喜びになり、「イマイチドキョウガウシテマイラセヨ」と仰せになったと言う（『同』）。この「宗祇沙汰ノ連歌」は、『萱草』であるとも、まだ草稿段階にあった『竹林抄』（後述）であるとも言われている。

2 種玉庵造営と『竹林抄』

文明八年(1476)、宗祇は、西洞院正親町にあった入江御所（三時知恩寺）の南に、種玉庵を造営する。ここは明応九年(1500)に焼失す

るまでの三十年間の宗祇の栖であり、公武の人々が集う文化の拠点となる。

その種玉庵の草庵開きの晴れの催しを伝えるのが、谷村文庫猪苗代家本『賦何船連歌』（猪／4－24／カ3貴）である。青と紫の打疊の料紙を用いた連歌懷紙（卷子本に改装）で、端作に「文明八年四月廿三日」と興行の日付が記されている。



『賦何船連歌』初折表、三折表

管領畠山政長の発句「ことの葉の種や玉さくふかみ草」は、庭前の牡丹花（ふかみ草）を褒めると同時に、「種玉」（漢の羊公が、その篤行によって石を植えて玉を得たという『搜神記』の故事に基づく）の語を読み込み、種玉庵における文事の発展を祈念する。宗祇も「露さへきよししげる木のもと」の脇句で応じ、政長の庇護に対して感謝の意を表している。宗匠は、幕臣の杉原賢盛が務め、その他に公家の長興宿禰、政長の家臣や時衆の僧など総勢十三人の連衆が集まった。しかし連歌の会席自体は、政長の「いつも千とせの松のかずかず」の祝言句で結ばれ、五十韻で切り上げられている。貴顕を迎えての会は早々に酒宴へと移行したのであろうか。残りの五十韻は宗祇の独吟となっている。

この会の一ヶ月後には、『萱草』に続く第二の取り組みである『竹林抄』十巻が完成する。『竹林抄』は、中国の竹林の七賢にちなんで、先達七人（宗硯・智蘊・能阿・専順・心敬・行助・賢盛）の連歌を編んだ撰集である。その中に、結庵して間もない種玉庵で詠まれた発句が二つある。

宗祇草庵を結びて始て一座侍し時

茂れなを代々の言葉の園の竹 賢盛

ここでは、詞書に「草庵を結びて始て一座侍し」と断っているなので、先に見た文明八年四月二十三日の会は公的な意味での草庵開きであり、賢盛を迎えたこちらの会が、まさしく最初の張行であったと考えられる。発句の季は「竹茂る」により夏で、同年四月の張行となる。『竹林抄』の序文は、文明八年五月二十三日に奈良の一条兼良に依頼されている（『大乘院寺社雑事記』）。その頃には編集作業もおおた終え、完成を間近に控えていたと見るから、この草庵開きの発句は、ぎりぎりの段階で採録されたことになる。種玉庵で詠まれたもう一つの発句は、暮春の句である。

宗祇草庵にて千句侍しに、暮春の心を

花落ちて鳥鳴く春の別れ哉 賢盛

この句は、『竹林抄』の成立を文明八年五月頃と推定すると、文明八年三月以前のものとなる。しかし、四月の草庵開きよりも前に、それも千句のような大がかりなものが張行されていたというのはいかにも不自然である。或いは「宗祇草庵」は種玉庵造営以前の、別の草庵であろうかと疑われる。ところが、この句に関しては、兼載からの聞書である『竹聞』に、次のような注が付されている。

此時ノ千句ノ発句、載第一春ハまだあさ
日色こき霞哉、祇第九花ヲノミ待事ニス
ル老木哉

この時の千句の巻頭百韻の発句は兼載が任され、第九百韻の発句は宗祇が詠んだという。兼載の発句「春はまだ朝日色こき霞哉」は、彼の句集『園塵 第一』発句部の巻頭をかざっている（宗 祇

の発句の方は句集類に収められていない）。その詞書には「文明九年春種玉禪老の庵にて」とある（「文明十九年」とする諸本もあるが、賢盛は文明十七年に没しているから、十九年はない）。この詞書に従えば、賢盛の「花落ちて鳥鳴く春の別れ哉」の句は、やはり種玉庵で詠まれたものであり、草庵開きの翌年、文明九年春の発句となる。

ただ、そうすると『竹林抄』成立の文明八年より後の句が採録されていることになる。この点については、『竹林抄』の諸本に句の出入りが多く、諸本の調査にあたった両角倉氏が、『竹林抄』は宗祇による数度の改修を経ており、成立の時期は流動的に見るべきだと述べていることを参考にしたい。賢盛の文明九年春の発句は、むしろ『竹林抄』の補訂がこの頃まで行われていたことを証明するものであるという見方もできよう。

ちょうどその頃、あるいは補訂後であろうか、文明九年二月二十日に、三条公敦が『竹林抄』冬部の書写を三条西実隆に依頼している（『実隆公記』）。前述した「宗祇三十句連歌」や「宗祇沙汰ノ連歌」も公敦の指示のもとで天皇に進上されていたことから、この場合も、進上本書写の一環であったかもしれない。

3 『竹林抄』撰集の意図

宗祇が『竹林抄』の序文を一条兼良に依頼したのは相応の理由があった。兼良には、『菟玖波集』の後を承ける准勅撰連歌集の計画があった。『新玉集』二十巻一万句であり、宣旨を待つばかりにまでなっていたというが、惜しくも応仁の乱の戦火によって焼失し、挫折してしまふ。宗祇は、兼良とは早くから交渉を持っていたから、その無念さは直接聞かされていたであろう。また、かつての『菟玖波集』の撰進や「応安新式」の制定は、二条良基と地下の救済の協力によってなされたが、『新玉集』「新式今案」における兼良の協力者は、宗祇の師、宗硯であった。しかし応仁の乱のさなか、宗硯は

既に亡く、先輩にあたる代表的な連歌作者は、あるいは没し、あるいは地方に下向していた。そのような状況で、宗祇は准勅撰連歌集の計画に地下連歌師として尽力することを決意し、『竹林抄』を撰定したに違いない。兼良もその意をうけて『竹林抄』の序文を次のように結んでいる。

拙き翁、今暫も老の波にたゞよひて命の露も存命る物ならば、続菟玖波集を集めん事を思へり。しからば、彼竹林集も諸家の打聞になずらへてさらに選び入れむといへる所しかなり。

文明六年の『萱草』にしても、かつて宗砌が自選句集『連歌愚句』を「新玉集ニ可被撰入候」と兼良に注進したように、撰集の資料として兼良に提出されていたのではないと思われる。

東国から帰洛した宗祇が、『萱草』『竹林抄』を相次いで世に出したのには、老齡の兼良の在世中に何としても撰集の計画を実現してほしいという思いが強く働いていたと思われる。また、時を同じくして宗祇が後土御門天皇や都の貴族たちの注目を集めたのは、勿論、彼が並はずれた連歌の上手であり、『古今集』や『源氏物語』などの古典学を継承していたからであろう。またそれと同時に、彼が宗砌の後継者として、地下の側を代表する撰集の協力者と目されていたからではなかろうか。

『竹林抄』に序を寄せた四年後、一条兼良は八十年の生涯を終え、『続菟玖波集』の撰集は実現しなかった。『菟玖波集』に続く准勅撰連歌集『新撰菟玖波集』が成立するのは、明応四年（1495）、宗祇七十五歳の年である。文明のころの宗祇は、あくまで兼良の協力者であり、撰集は兼良によって遂行されるべきものであった。しかし、『新撰菟玖波集』は、兼良の子冬良に序文を依頼しているものの、実質的な撰集作業は、種玉庵において宗祇を中心に進められたのである。

「宗祇法師画像」



（附図 8-42/ソ/1貴別）

【参考文献】

- 金子金治郎 『宗祇の生活と作品』
（桜楓社 1983）
- 奥田勲 『宗祇』
（人物叢書 吉川弘文館 1998）
- 島津忠夫著作集第四巻 『心敬と宗祇』
（和泉書院 2004）
- 木藤才蔵 『連歌史論考』 上
（明治書院 1993）
- 新日本古典文学大系 『竹林抄』
（岩波書店 1991）
- （はせがわ ちひろ）